玉敷神

一

へ13
984
1

遠門
號984
巻1

頭註

○生死流轉玉散袖自序

鬼を畫く。功ハ成安く。狗馬を畫く。功ハ成難く。韓文公が確言異端虚無宗の敵とハ朱子先生の正論也。釋阿の敵行虚説妄誕と言ハ。何を以てか。因果應

の。惑ひを解ざるんや。紅顔空〳〵変じ
桃李の粧ひを失ひぬ。諸行無常の世の
光景夕ァ道ハ聞ゆ。朝ハ黄泉の旅ハ
赴くふど。是生滅法の理ヲ。嗚呼あんと生滅滅
為。ヲット合黙寂滅為楽。夢ゑ現ろ。知〳〵ゑども。
轉徂槃の。経言倚語一字不説の。切幕

から。其序ぶくきを。ゑ爾也。

文政四辛巳年正月

東里山人 誌

春咲ぬるのや
ろろの
深見艸
牡丹花老人
○鎌倉桐ヶ谷の町人
利徳屋
萬助
勘福
○玉五郎が
女房
於徳
○雪の下の町人
萬福屋
玉五郎

○欲張切藏の娘子早咲

太郎
弥阿あ
○七里ヶ濱の漁師

大坂天満宮

堂上方の
かいさいく
堂上方の
かいさいく

目録

上の巻

發端○方便の門を開きく

真実の相を示を說話

第二回○和光同塵い結縁の始め煩惱を解說話

中の巻

生死流轉玉散袖上巻

東里山人著

發端

方便の門を開きく真実の相を示を說話

合者離之始。樂兮憂之伏する所あり。悟るひ白居易る。子をさ死立て。枕よ殘る藥を恨む。聖人も塵情の。惑ひい解ぐく。況や凡倍よおのくをや。生者必滅の理る。會者定離の金言も。其場よ至て如何ぞ

胸よ浮ぐんやさんべ悲しゝこの至くかゝ〜紀い差くしく
夫よ抑〜と老く子を失ひ〜より哭慟のいあらじと
人をも身をも恨むんよ嗔恚の火ゝ燼ると紀ゆく煩悩の大
遂ぐ去ぐ我慢の鬼のこのめ立愚癡の地獄をあゆき
より作を儲く已ゝう隊ると御釈迦も説ゆえり愛よ
昔閻魔天下の頃諸國行脚の僧よ夢世法師といふ
者あり生國を尋ねべ武蔵の國宮戸川の邊よ住く
頗る富家の者あしぐ養ひ舍を捨く遠よ出家遁世

の身とあり由縁故いまぐ俗ゝしと紀夫婦睦まゝく
暮せしぐある紀法用あつく暫時他國へ赴むきゝぐ跡
あく妻ハ隣まる家の今郎と蜜よ心を通ぐ合ふ義
を。あせ〜飛夫帰ゝあべ。彼ゝ紀ゝを怨き。かの蜜夫と
謫議ゝ。夫を殺さんと思ふ出来よゝり。頃く夫の飯と
いふ頃妻ハ毒の酒を造ゝく。待ゝよ程もあく。家よ帰
るよ。妻いひるハ。遥〜の旅の労きを。あぐさあ。ちら
ぜんとおひて。酒を釀あきをぐゝあり。ぐ〜進めまいせん

とく。給仕婢女をよび。其酒持てきたれといひ付るふ。
其婢女ゑての。狼藉しきりをもちり。其毒の酒のユミ
をも。能ちりれば。今此湯を持出く。眼前よ主を殺さんと
我不義も。内室君の悪逆よりもあらば。亦明白説考るを
いなんも。いとゝれば。如何いせんと。志案ひくひく。出ひるが
ゝと思ひ出く。毒の酒を持出れとく。つぎと噴き倒く
酒をこれ壊捨る。係るたくみと知ざれば。大きふ怒り下女
を捕く。打手鄭る。妻ハこれを見く。下女が苦痛の余不

萬一吾身のうへの。恐るをいひやせんと思ひれば。其よ
手荒き呵責しく。遂よ婢女を打殺しぬ。其婦ハ一時
の怒りよ。人の命をとりしる。偏よ短慮の誤とあり。後悔
の涙胸を裏く。愁傷の如ひよ心を傷り。死骸よ對して
さめ〳〵よ他云ふ。せめて追福の営こそ。渠が迷ひの
や。散ふと最懇情よ。聖辺の送りを。美僧高僧の
聖人を待て。萬巻の経を誦し。香花を向供類
して。偖甚るハ異義ふくもるが。妻の不義ハ。尚止

まゝ父の目を恐び〳〵心を通じて一刻のちぎりを千歳の感通をあし。天理ふ欠さる。月日を過り名るまゝ。
遂よい不義の罪孤は毒酒の毒るのよう。下女が
忠死のるゆあどひろ〳〵まゞ耳よ聴名れば憤怒骨髄ふ
徹し。妻を呵責して。さ死よ婢女が苦痛死せる酬ひぞと
打敲し〳〵果い赤躾とふし。手足を縊く。庭の泉水ふ
漫し〳〵寒風ふ吹さらさして。遂よ凍冷死ゆぞさせう
る。斯て下女を葬し〳〵辺ふ。妻の死骸をも埋く。善

悪塚と名号。近隣合壁の人〳〵ふ。下女が忠節。妻が
不義我身の因果物語して。直さ髪剃髪ふし。世を遁
深の衣よ換ゆ〳〵。こゞう夢世法師とぞよびさう名る。
爰の世を。爰ぞといふも夢ふれや。何を現と。定むべきれ
と。憑〳〵多死世を悟ア。捿訓〳〵古卿を愛豆く。
京師の方と志慮ゆゞう鎌倉ふ建長寺。光明ら等
の。霊場を頂拝ふし。まより鶴ヶ岡八幡宮へ。詣で名る
ふ。契頂　将軍家より。造営成就あゝく。荘厳更さ

人の目を驚き。金銀瑠璃硨磲の梁。碼磁珊瑚琥
珀の蔓。日に映じて色を爭ひ。境内羞明眩輝くその
美麗を拜見せんと。近在の老若男女。日々群參して。
人豆の絶間なかれば。その辺り近き老人。糸治の人の懐を
見當て。銭儲けせんとて。俄に葭簀張の茶店。潮れ
の八景を移し。菰莨の酒店。西湖の十景を形容。
栗餅の砂糖。抵園豆腐の曲伐曲馬。怪業貝細工樂
焼の作り物。あるいは行田の人形口上。隨て文字を出

善舞の異人。幣帛と。象頭山の百歩一を現ぜ
揚貴妃を欺く。娘李夫人を厭き。満花齢往来人
見て。見て。と。綾羅の袂を翻し。綿綉の裙を
とひ。奇麗あるいは照火ゆくゆく天人の影向も斯や
と計。驚感で夢世法師も悄然。呆ぜ。とは
く。在ぐそや。黄昏ちかくなれば。蟻のごとく
集りし人豆もいそいそ東西へ散去。蜂の如くに群がりて
利慾を闘う商人も。塒を急ぐ徒鳥と共に。ものが家

路より立帰きば八幡宮の境内へ。大風の吹〳〵跡のぞく。
神前の御燈さへ幽かふ暗夜を星月夜梟の声気疎
げよへの腸を砕く悲〳〵。憂世法師いとゞ〳〵と。哀
光景をそへ。偖も淺ましき死人のふり。今日何彩くと
あく。式宮より偖ぐ御のぶさぬ〳〵。よき人如意の立願を
懸あぐら。誰あく燭を。通夜〳〵なりく。御灯を挑
ぐんとする若ふきこそ是非もふ〳〵。そも〳〵哀御神へ
香けあくも。人皇十六代の帝。應神天皇の御支也

御神詭より我無量劫より以来三有より化生〳〵。
善功方便を修〳〵。諸の衆生を濟度を我名を大
自在王菩薩と曰ぶ〳〵さありしより。則ち大菩薩の
號。勅許あらる。係る有難き御神を。疎略ふふ〳〵
なりぐやと急ぎ拝殿の。濵縁ちく跪づきく。歎
阿の。御名を唱えつ〳〵。いよく佛智の廣大なるを思ひ
〳〵生死の夢さめく。なほ覚の寤ふ至らんことを
願ふ〳〵。今哀ハ愛よ。通夜〳〵ならんと。縁の傍より倚て

周る北斗の空を眺望居たりしよ夜も次第に更ける
丑満の撞鐘〜〜と響く頃刹白衣の束帯あり〜〜
若一人忽然と歩行来るふ夢世法師儀よ潜然と是
を見れば忽髪長く肩よ垂白き衣あり〜〜
奈何さる神主の餘義あきを立願ありやと思ひる処よ
カの人神前近く倚〜〜大自在王菩薩よ告く敬白
今胥御氏子の中よ出産あるべの四人あり大ぜうどの
ある守護のたり御出馬もあるべきや斯言上い俱生神

前上六

あると。名乗ゆくべき社の唐戸。自然よ開き。内陣の戸と
帳を撥け。白馬よ乗跨り〜八幡大菩薩出現まし〜
八 コレハ〜俱生神ぞの由。毎度御太義よぞんじまし
其を兼て氏子の中よ臨月の婦人あるゆハ兼知いとして
ぞ。安産祈造営のとんさろよ取紛ことみあるべ
社え遷宮ぞ〜〜ぞんじ萬端不手都合ゆ。今胥
殿よ参ゆまうせ申た〜。悪あく安産いとも。母子とも
怪我のあきゆ。御守ゆさるべ〜〜と言葉のよ
[作] ある

など。是は美麗に御造営。惣収にぞんじなば、定めて御
混雑の義と。推察仕れば拙者一人にて異なく相きまりし
事すべく。去ながら衆生の子。生涯の禍福吉凶ッ表栄枯
の義は。産神の授けなれば。とれをば定めがたくべし ト
八 いさゝか手ぬけも。そもの事ぞ嘆きしと暫らく
考ゝ都合四人のなあれば。かの釈迦尊が涅槃経に説る
四句の文を授けられし。天帝へは其よりと王を奏聞
すなはちそうときまる 作 それもしくぞる。後刻安否は

まさしき事と仰せなすべし と。表の方へ立出られば。社の裏戸
いかさえの如くに閉られる。夢想法師は倚に潜然て。
世にも不測のなりをと見聞なる世俗の徒に。思はず物
聴およびつれども。眼前にとれを賭るは今宵嘘ならで
倭も奇代の珍らなりと。まて后の音信を聞まちし
さまに眠りもやらで待居たるに。暁刻の一番鶏啼頃に。
かの御神非立奥まで。以前のとくに音なえば。唐戸
開きて。八幡宮出現あり 八 コレ〳〵度〳〵の。御心配

若山田屋伊助書林

高大治

果もんあるべ業ぐゆあり。猶の外却て是〜よくよあり〜とのまるり圓〜いづまるも動て。怪き安産わ〜て。拙者ふ却くも満足せり。先一ぢんが雪の下の。萬福屋長兵衛が妻初産わ〜〜男子あれば則ち。誕行無常の文を授けまづるあり甚次が桐ヶ谷の。利徳屋萬助が妻三度目わ〜〜。女の子あり。是も。是生滅法の文を授けまづるあり。こぞん目ハ扇ヶ谷岩永ぞの〜藩中。欲張切蔵が妻初産わ〜〜。女の子あり是も生滅滅為の文をまづけ

たるあり。四ぞん目ハ七里が濱の漁師。阿弥平が妻。是も初産わ〜〜。男の子あり。是も。寂滅為樂の文を授けまづるあり。以上四人のうち。二人ハ男子わ〜〜。二人ハ女子あり母子ともに恙なれば。安堵わ〜〜。とらひ捨〜。立帰よハ播宮る暇ぞ〜〜。内陣のうちより入りの。夢世法師ハ。矢立の筆わ書流く。旅日記のそ〜〜。是を書純〜。我身の盛衰も。つ〜〜あるべる理ぞ。今野延生〜四人の子ぞも。まさ奈何わ死。是衰栄枯ろうると。獨嘆息をよる

3年10月

○夢世ばなし

所い是より。京師

言葉すくなく

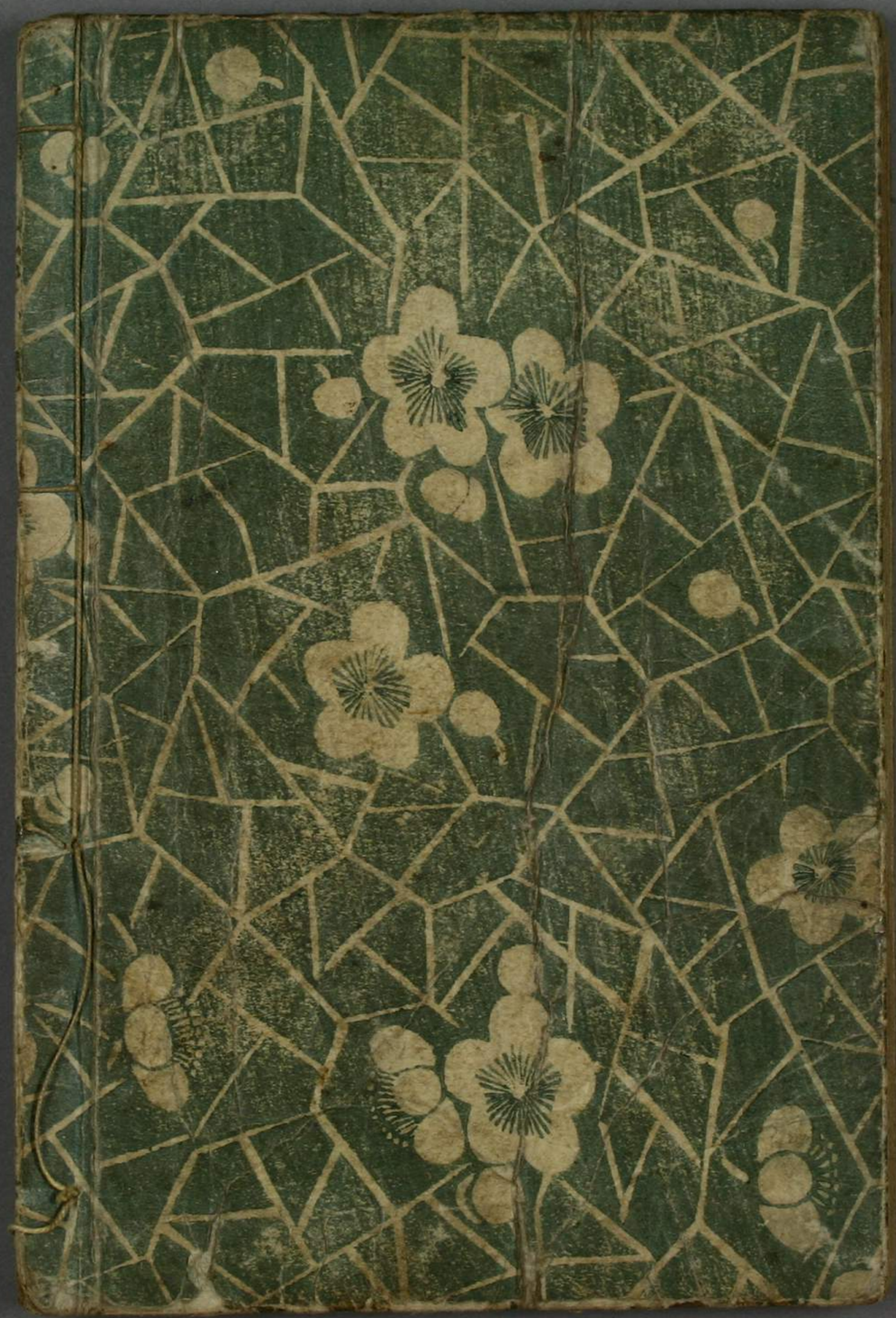
うち殺し

死せり。四人の子供成長して。

句の文附合して分を景色

歳立て后契法師老翁と

不測子孫俱せ孫の吉子

悟の心を驚きまどく。さべて

○夢世はいと是より。京師
拜あり。おそろしくの歳ろうそち移り
あり。旅日記のそこふまき記せり。四人の子供成長して言葉
さめざめ哭悲あり物語よ四句の文附合して分を景色
あり。世よ世界あり。四十余年の歳立て后契法師老翁と
あり。かの子供名よ巡り遭く。不測多く俱せる外の吉
を聞く昔ものがろうよ各述懐の心を驚ませまぐ。まぐて
最後五巻よ。解分ろを聴べし。